

初報の5日後。「ザ・ブラスト」は、ニコラス・ケイジが結婚取り消しを申請した理由に、酩酊していたことと、妻の前科を挙げた。

（コイケは、08年と11年の2回、ロサンゼルスにおいて飲酒運転で検挙されている。（中略）昨年、ラスベガスでも飲酒運転で逮捕され

て刑事事件となったが、まだ結審していない）前夫へのDVでも逮捕歴アリという。オスカー俳優を手玉にとった勁い女、か。

# 「人工透析」中断死で 渦中の院長が語った『高瀬舟』

3月28日、「春の嵐」が吹き荒れた——。渦中の公立福生病院（東京都）の担当医と松山健院長（65）が、騒動後、初めてメディア各社の取材に対応。注目の席で飛び出したのは、院長の「論争上等」の発言だった。

ものの、後に中断自体がもたらす呼吸苦などに襲われ、やはり透析を再開してほしいと意思表示した瞬間もあったという。だが、結局再開されることはなかった。

これは「尊厳死」なのか、それとも病院側に瑕疵がある「殺人的行為」なのか——。日本透析医学会が調査に乗り出す事態に発展し、誰もが「答え」を見出せないなか、病院側が報道陣に向けて説明の場を設けたのである。まずは担当医が、「医療者として、患者に死んでほしいとは普通思わない」



「尊厳死」を乗せた舟はたゆたう

「福生事件」。それは、3月7日付の毎日新聞の報道で表面化した。福生病院に入院した44歳の腎臓病患者が、昨年8月人工透析を止めて1週間後に亡くなったことが発覚。透析患者にとって、その中断は事実上の死を意味する。件の患者は、透析に伴う苦痛などの「副作用」を嫌がって中断を選択した

と、自分は「殺人医師」などではなく、透析を再開しなかった手続きは正当であったと主張。それは松山院長も同様だった。そしてその松山院長が、「個別」の福生事件の是非だけではなく、「一般論」としての尊厳死を、もっと広く議論すべ

きではないかという趣旨で発したのが次の言葉だ。「『高瀬舟』の話が報じられていた。皆が護送する同心（江戸時代の役人）の立場に身を置いてみるべきだと。しかし、私はそれでもまだ甘く、もう一步踏み込むべきだと思う。同心ではなく、剃刀を抜いた兄の立場で考えてみるべきだと」

森鷗外が著した『高瀬舟』。長らく病に苦しんでいた弟は、自らの咽喉に剃刀を突き立て、それを抜いてとどめをさしてほしいと兄に迫る。逡巡の末、兄は剃刀を抜く。結果、彼は弟殺しの罪人となり、高瀬舟に乗せられ島流しに。兄を護送する同心は、この人は本当に罪人なのかと自問する——安楽死・尊厳死と向き合った名作である。

本誌（3月28日号）は福生事件に関連し、ある識者の「今回の一件は、皆が同心となることを求めているのだと思う」という見解を載せた。これに対する松山院長のアンサーがある。つまり「高瀬舟返し」である。つまり安楽死、尊厳死の「傍観者」ではなく、「当事者」になって考える必要があるのではないかというわけだ。そもそも本誌で「高瀬舟論」を持ち出した、ジャーナリストの徳岡孝夫氏が院長の問い掛けに再び応える。「実は19年前に妻を看取った時、私も『高瀬舟』の兄になってるんです。彼女が最期を迎える間際、人工呼吸を試みれば、妻はもう少し生きられたかもしれない。でも咄嗟の判断で、神様のもとに行った人と呼び戻しても仕方がないと、私は人工呼吸を選択しなかった。今も後悔はありませんが、結局その瞬間、瞬間で決断するしかないんだと思います。世の中は時々刻々動く。高瀬舟に乗って考えている間にも、舟はどんどん流れていくのです」願わくは花の下にて春死なむ。散り際に思い巡らす桜の季節——。



昭和31年2月20日第三種郵便物認可 平成31年4月11日発行(本曜日発行)(4月4日発売)第64巻第14号

# 週刊新潮

4月11日号  
420円



14